血縁関係に対する潜在的態度と顕在的態度
Implicit and Explicit Attitudes toward Blood Ties

ターン 有加里ジェシカ*, 村田 光二†, 唐沢 かおり*
Yukari Jessica Tham, Koji Murata, and Kaori Karasawa

*東京大学, †成城大学
The University of Tokyo, Seijo University
tham09@outlook.jp

概要
本研究では、犯罪者の子どもに対する偏見の要因について、潜在的態度と顕在的態度が一致しないことを検討した。シナリオ実験を行った結果、顕在的指標によれば人々は遺伝的つながりを重視せず、むしろ社会的つながりを重視することが示された。しかし、シナリオ中の子どもが犯罪者の実子であると知らされた参加者はそうでない参加者よりもその子どもの性格をネガティブに評定する傾向にあり、潜在的態度として人々は遺伝的つながりを重視することが示唆された。

キーワード：潜在的態度、顕在的態度、偏見、血縁、遺伝的つながり、遺伝的本質主義

背景
犯罪者の子どもは犯罪に関与していなくても、「潜在的犯罪者」と見なされることがあり（Codd, 2008）、インターネット上の掲示板では「殺人者の子どもは、将来殺人者になる」という書き込みがあったという事例も報告されている（阿部, 2015）。このような状況の中、犯罪者の子どもに対する偏見への対処方法に関しては、検討がなされている一方（Thulstrup & Karlsson, 2017）、犯罪者の子どもに対する偏見が生まれる要因に関しては、いまだ十分な検討がなされていない。

本研究では犯罪者の子どもに対する偏見が生まれる要因を、次の 2 点に焦点を当てて検討する。1 点目は、「血は争えない」という言葉に表されるように、犯罪者の子どもが犯罪者の「血」、つまり遺伝子を受け継いでいることを人々が重視している可能性である。2 点目は、「氏より育ち」という言葉に表されるように、犯罪者の子どもが犯罪者に育てられたことを人々が重視している可能性である。

人々が遺伝的つながりを重視する傾向を持つことは、遺伝的本質主義（Genetic essentialism; Dar-Nimrod & Heine, 2011）の研究によって明らかにされている。遺伝的本質主義とは人間のあらゆる特徴や行動を遺伝子によって説明しようとする認知バイアスであり、遺伝子を共有している人々を均質的に見なしたり、遺伝子によって将来が決まると考えたりするなど、様々な社会的場面で人々の態度に影響を及ぼす。これに基づけば、犯罪者の子どもに対する偏見の要因として犯罪者との遺伝的つながりが重要であると考えられる。

しかし、潜在的態度と顕在的態度はしばしば一致せず、それは特に社会的に求められる態度が明らかである場合に顕著である。例えば性差別や人種差別に関して、これまで多くの研究で潜在的態度と顕在的態度の不一致が報告されてきた（Nosek et al., 2007）。これを踏まえると、たとえ人々が遺伝的つながりを重視していても、生来性犯罪者説などが忌避される今日の社会（Collins, 1992）においては、それが顕在的態度として現れるとは考え難い。

以上を踏まえて本研究では、潜在的態度と顕在的態度を区別して、犯罪者の子どもに対する偏見が生まれる要因を検討する。具体的には、人々は潜在的態度としては犯罪者の遺伝子を受け継いでいることを重視するのに対し、顕在的態度としてはそれを否定するという仮説を立て、シナリオ実験を行った。

方法
参加者
大学生 57 名が参加した。そのうち 40%は女性で、平均年齢は 19.44（*SD* = 1.34）歳であった。

手続き
参加者はまず、「社会的に望ましくない性格が遺伝すると考える程度」（顕在的態度①）を回答した。

参加者はその約 1 カ月後に実験室に呼ばれ、質問紙への回答を求められた。質問紙では、最初に事例 1 として中年男性が上司を絞殺した事件についての裁判の資料が提示され、次に事例 2 としてある中学校のスクール・カウンセラーが、同級生に暴力をふるった男子生徒に関してまとめた資料が提示された。

2 つの事例の間では、事例 1 の中年男性と事例 2 の男子生徒の関係に関するわずかな情報が提示され、この際、参加者はランダムに 3 条件（実子条件、養子条件、無関係条件）に分けられた。実子条件では、男子生徒が中年男性の実子であり、中年男性によって育てられたことが知らされた。養子条件では、男子生徒が中年男性の養子であり、男子生徒の誕生直後から中年男性によって育てられたことが知らされた。無関係条件では、男子生徒と中年男性の関係について何も情報が提示されなかった。

参加者が事例 1 を読んだ直後に、「中年男性の性格が社会的に望ましい（あるいは望ましくない）と考える程度」を測定した。同様に、事例 2 を読んだ直後に、「男子生徒の性格が社会的に望ましい（あるいは望ましくない）と考える程度」を測定した（潜在的態度）。なお、事例 2 は男子生徒の暴力の原因やその程度に関して曖昧な記述を含んでおり、男子生徒の人物評定に関する質問に回答するに当たって参加者に想像の余地を与えるものであった。

質問紙の最後には、「犯罪者とそうでない者の違いの要因が生物的（遺伝子など）だと考える程度」（顕在的態度②-1）、および「社会的（友人など）だと考える程度」（顕在的態度②-2）を測定した。

質問項目

「社会的に望ましくない性格が遺伝すると考える程度」（顕在的態度①）の測定に当たっては、「不道徳な人」、「信頼できる人」などの 13 項目を提示した上でそれぞれの特徴がどの程度遺伝的影響を受けていると思うか、1 を「まったくそう思わない」、7 を「非常にそう思う」とする 7 件法でたずねた。本研究ではそのうち社会的望ましさに関わる 7 項目をまとめて使用した（α = 0.90）。「犯罪者とそうでない者の違いの要因が生物的（遺伝子など）だと考える程度」（顕在的態度②-1）、および「社会的（友人など）だと考える程度」（顕在的態度②-2）はそれぞれ 1 項目ずつ、1 を「まったくそう思わない」、7 を「非常にそう思う」とする 7 件法で測定された。

「中年男性の性格が社会的に望ましいと考える程度」と、「男子生徒の性格が社会的に望ましいと考える程度」（潜在的態度）は、「寛容な」、「温かい」などの 11 項目を提示した上でそれぞれの特徴が中年男性と男子生徒のそれぞれの性格にどの程度当てはまると思うか、1 を「まったく当てはまらない」、7 を「非常に当てはまる」とする 7 件法でたずねた。本研究ではそのうち社会的望ましさに関わる 4 項目をまとめて使用した（中年男性: α = 0.78; 男子生徒: α = 0.74）。

結果と考察

顕在的態度に関しては仮説通り、人々は遺伝的つながりを重視しておらず、むしろ社会的つながりを重視していることが明らかになった（表 1）。具体的には、「社会的に望ましくない性格が遺伝すると考える程度」（顕在的態度①）の平均値は中点を下回っていた（M = 2.83, SD = 1.29）。また、「犯罪者とそうでない者の違いの要因が生物的だと考える程度」（顕在的態度②-1）の平均値は中点を下回っていた（M = 3.02, SD = 1.40）。それに対して、「犯罪者とそうでない者の違いの要因が社会的だと考える程度」（顕在的態度②-2）の平均値は中点を上回っており（M = 5.40, SD = 1.16）、「生物的だと考える程度」と比較すると有意に高かった（t (56) = 9.23, p < .01）。

表1 遺伝的つながりに対する顕在的態度

	M	*SD*
社会的に望ましくない性格が遺伝すると考える程度（顕在的態度①）	2.83	1.29
犯罪者とそうでない者の違いの要因が生物的だと考える程度（顕在的態度②−1）	3.02	1.40
犯罪者とそうでない者の違いの要因が社会的だと考える程度（顕在的態度②−2）	5.40	1.16

顕在的態度①はシナリオ実験の約 1 カ月前に測定されたため、本研究の主旨を参加者が全く知らない状況における個人差であるのに対し、顕在的態度②はシナリオ実験の最後に測定されたため、もし参加者が本研究の主旨に気付いていた場合その回答が歪められている可能性も指摘できる。ただ、顕在的態度①と顕在的態度②で一貫して遺伝的つながりは重視されていないことを踏まえると、仮説の妥当性を支持する結果であると考えられる。

次に潜在的態度を検討するため、条件間で男子生徒の人物評定に差があるかを確認した。もし、潜在的態度として人々は遺伝的つながりを重視するという仮説が支持されれば、中年男性と男子生徒に遺伝的つながりがあるとする実子条件においては他の条件においてよりも男子生徒の性格の社会的望ましさは低く評定されるであろう。

分散分析を行うと、3 条件間の差は有意傾向であり（F (2, 54) = 2.78, p < .10; 図 1）、多重比較（Tukey 法）の結果、男子生徒が中年男性の実子である場合（M = 3.08, SD = 0.96）は無関係である場合（M = 3.74, SD = 0.75）よりもその性格が社会的に望ましくないと判断されるが、その傾向は有意傾向に留まった。それに対し、養子である場合（M = 3.26, SD = 0.90）と無関係である場合の間には差が見られなかった。

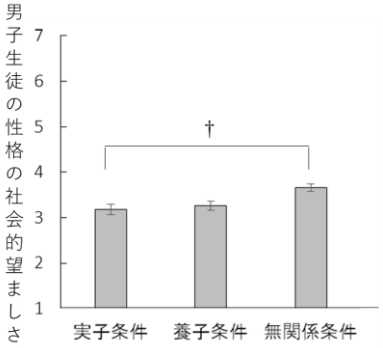

図1 条件ごとの男子生徒の性格の評定

次に、人物を評定する際の個人差を取り除くため、「中年男性の性格が社会的に望ましいと考える程度」を統制して共分散分析を行うと、3 条件間に有意な差が見られた（F (2, 53) = 4.01, p < .05）。多重比較（Tukey 法）の結果、男子生徒が中年男性の実子である場合は無関係である場合よりも有意にその性格が社会的に望ましくないと判断された。それに対し、養子である場合と無関係である場合の間には差が見られなかった。

もし人々が潜在的態度として遺伝的つながりを重視していなければ、このように実子条件と無関係条件の間には差があるのに対して養子条件と無関係条件の間には差がないということは起こりえないであろう。ただし、本研究の結果では実子条件と養子条件の間の差は見られなかったため、遺伝的つながりを重視する潜在的態度を示すには十分とは言えず、さらなる研究が必要である。

以上より本研究では、人々は顕在的態度としては社会的つながりを重視しているが、潜在的態度としては遺伝的つながりを一定程度重視していることが示唆された。つまり、人々は遺伝子の影響を重視しているにもかかわらず、それを意識的か非意識的か表出しない。遺伝子を受け継いでいると性格が似るという考えは、犯罪者の子どもに対する偏見のみならず、他の社会的地位の低い人々（ホームレスやブルーカラー労働者など）の子どもに対する偏見、さらには社会的地位の高い人々（医者や弁護士など）の子どもに対する偏見なども生じさせるであろう。今後、このような人々の潜在的態度を考慮に入れた上で、様々な偏見への対処方法を提案することが求められる。

文献

阿部恭子 (編) (2015). 加害者家族支援の理論と実践―家族の回復と加害者の更生に向けて― 現代人文社

Codd, H. (2008). *In the shadow of prison: Families, imprisonment, & criminal justice*. Portland, Oregon: Willian Publishing.

Collins, R. (1992). *Sociological insight: An introduction to non-obvious sociology: Second edition*. Oxford: Oxford University Press.

Dar-Nimrod, I., & Heine, S. J. (2011). Genetic essentialism: On the deceptive determinism of DNA. *Psychological Bulletin, 137,* 800-818.

Nosek, B. A., Smyth, F. L., Hansen, J. J., Devos, T., Lindner, N. M., Ranganath, K. A., . . . Banaji, M. R. (2007). Pervasiveness and correlates of implicit attitudes and stereotypes. *European Review of Social Psychology, 18*(1), 36-88.

Thulstrup, S, H., & Karlsson, L, E. (2017). Children of Imprisoned Parents & Their Coping Strategies: A Systematic Review. *Societies, 7*(2), 15.